

九 耳か心か自慢か

すべて自慢はあまり見つとも好いものではありませんが、所謂信者の聽聞自慢ほど、信仰上厄介なものはありません。

或信者が死んで極樂に參り、七寶樹林の木の間を通りて、八功德水の池の側を過ぎ、阿彌陀如來のお側近く至ると、金銀珠玉の立派な莊嚴。いづれも目を奪ふばかり。それに瑠璃・玻黎・磈磈の三段の結構な棚がある。上の棚には澤山な田蚶に乾物、中の棚には數多の木海月、下の棚には仰山な數の子が積み重ねてあります。信者はこれを眺めて不審でたまらず、「極樂の御馳走は百味の飲食と申して、それはく御馳走と聞いて居たのに、さては嘘であつたか。但しは極樂にも近來は勤儉力行と云ふのか、それにしても精進でありさうなものに、魚氣のあるのは合點がゆかね」と、案内役の觀音様に聞けば「あれは田蚶や木海月や數の子ではない。娑婆の人間には目先ばかりで佛像を拜んだり、耳先だけで説教を聽聞したり、お有難うござります南無阿彌陀佛と、口先ばかりの御領解を述べる、僞信者が多い、さう云ふ者等が死ぬると、肝心の魂は眞先に地獄に行つて了ひ、佛像を拜んだ目と、説教を聞いた耳と、念佛を稱へた舌とが、極樂へ參つて來たのぢや。あの田蚶と見えるは目玉の乾物、木海月と見えるは耳の乾物、數の子と見えるは舌であるぞ」と説明せられて、信者は成程と感心したさうな。

目先の禮拜、耳先の聽聞、口先の領解出言、誠にたよりないではないか。姿形に佛縁を結んでも、心に結ばねば所詮もなく。耳に聞いても心に聞かねば甲斐もない。「聽聞心に入れ申さんと思ふ人はあり、信をとらんずると思ふ人なし」とは蓮師の御悲嘆。大様に聞くでない、自慢に聞くでない、道具にするでない。只管我身の一大事と心得、「解脱の耳をすまして、渴仰の首をう

なだれて、
之これを懇ねんごろに聞ききて、
信心しんじん歡喜かんぎの思おもひをなすべし」。